

■ 「道」分科会コーディネーター  
愛知大学 教授 戸田敏行 氏



「道」分科会では、はじめに浜松河川国道事務所の田中所長から、未来につなぐ三遠南信自動車道ということで、三遠南信自動車道の進捗についてご報告をいただきました。今年度は、(仮称)佐久間インターチェンジから(仮称)東栄インターチェンジまで、来年度は天龍峡インターチェンジから龍江のインターチェンジまでが開通予定ということで、着実に進んでおり、現在約5割が完成したということでした。新ビジョンの期間は2030年までですから、そのときまでの完成を目指すべく、参加者一同努力するということでした。

次に、南信州新聞の河原様から、「三遠南信 Biz」の発刊に向けて、ということで、ご報告いただきました。ローカルビジネスなど、人を軸にして三遠南信をつないでいくことを目指しておられるということでした。県境で情報が途切れるという大きな問題に対する一つの試みであります。

「道」分科会では、新ビジョンの重点プロジェクト1と2の意見交換を行いました。

重点プロジェクト1は、「三遠南信交通ネットワーク形成プロジェクト」です。道路は道路相互がつながることで効果が出るのですが、県境を越えると、なかなかこの道路間のつながりを考える場がないというこ

とで、こうした情報交換は新ビジョンの存在意義といってもいいぐらいに重要なものです。このネットワークから、生産性の向上や生活の質の向上というストック効果、新たな産業をつくるというフローの効果を生み出すというものです。

重点プロジェクト2は、「三遠南信圏民の一体感醸成プロジェクト」です。これは道路がつながった線を面にしていく、ソフトの動きが必要だということです。

まず、「三遠南信交通ネットワーク形成プロジェクト」については、命の道ということで、非常に切実な意見が多くございましたが、整理すると空間的に大きく三つのポイントがありました。

1点目は南北軸です。三遠南信地域は、北に大きく広がり、三遠南信自動車から中央自動車道、長野自動車道、上信越自動車道につながり、日本海に至ります。一方南側は、三遠南信自動車道から、浜松三ヶ日・豊橋道路(仮称)、そして渥美半島につながり、日本列島の南北に長い横断軸が形成されます。それに伴い、これまで結ばれなかった産業が結ばれ、三河港の物流や日本海との関連性も意識すべきだというご指摘がありました。また、文化、伝統芸能のつながり、リニア中央新幹線と交差すると航空宇宙産業のつながり、こういう見方が出てくるということでした。

2点目は、中山間部を活かす道路、特に国道151号です。三遠南信自動車道とともに、国道151号がどうつながるかで、県境山間部の通学圏が変わり、つまりは暮らしも変わってくるというお話がありました。リニア中央新幹線が開業すると、県境付近の地域は、東京に出るために北に行くか、南に行くか、丁度ボーダーラインになります。そういう意味で、三遠南信自動車道と国道151

のダブルリンクとリニア中央新幹線の駅とのネットワークをどう結んでいくかは、中山間地域にとっては重要だということです。

3点目は、太平洋側都市部のお話です。三遠南信自動車道と浜松三ヶ日・豊橋道路（仮称）の南北軸、東名・新東名高速道路の東西軸がちょうど循環になり、そこに港の機能が加わり、新ビジョンでは、浜松・豊橋環状道路とされています。先日の台風24号の際、特に静岡県は停電が随分あって、信号が止まって通勤できないということもあったようですが、こうした災害には北上して迂回できるという、いわゆるリダンダンシーになるということでした。

次に「三遠南信圏民の一体醸成プロジェクト」についてです。1点目、喬木村では、ICTで熊本県、オーストラリアと既につながっているということでした。また、ケーブルテレビのコンテンツの共有など、圏域内外で既にある除法基盤をつなぐという意見が出ました。

2点目は道の駅で、三遠南信地域には27か所あります。それぞれの高低差が1,000mぐらいあり、売っているものが違うので、これをきちんとネットワークすることが必要、ということでした。また、東北の事例が紹介され、道の駅をつないで周遊をつくってはどうかという意見もありました。新城市での高速道路退出実験は1時間でしたが、退出時間を2時間に延ばすと随分行動範囲が広がり、地域を回ってくれるのでは、ということもあります。

3点目は、サイクルツーリズムで、浜名湖を回るハマイチの例ができました。また、これを日本海までの南北方向に伸ばして、さらに大きな大会にできるということでありました。

以上で「道」分科会の報告を終わらせていただきます。

## ■ 「技」分科会コーディネーター

## 豊橋技術科学大学 副学長 大貝 彰 氏



「技」分科会では、新ビジョンの基本方針で示されております、「革新を取り込む産業創造圏の形成に向けて」、というテーマで議論を行いました。まず、意見交換の前に、事例紹介ということでご報告がありました。

一つは、豊橋市産業部の稲田部長から、農産物の販路拡大事業、浜松市、豊橋市、田原市、飯田市が連携して、農産物の海外輸出事業を展開しており、広域連携で取り組むことのメリットについてのお話をいただきました。もう一つの事例紹介は、新城軽トラ市のんほいロットについて、実行委員会の加藤様よりご報告をいただきました。

二つのご報告を受け、意見交換を行いました。ポイントとしては、重点プロジェクト3「地域の稼ぐ力強化プロジェクト」のうち、一つは既存の産業の活力をいかに推進して稼ぐ力をつけていくか、もう一つは、新しい産業をいかにこの地域に取り込んで稼ぐ力をつけていくか、という二つの視点で意見交換を行いました。個々の発言について1つ1つ紹介するには時間がないので、ポイントをまとめてご説明させていただきます。

既存産業の活力をつける、という議題において、重要になるのは何かということで、まずは人材を育てる、確保するということが重要なのだというご意見が、伊那商工会議所の川上様、田原市商工会の河合様などからありました。また、三遠南信地域全体

の道路整備、基盤整備も重要になる、ということについては多くの方から意見がありました。

そして、三遠南信地域全体の一番南の河口から、一番北の山のほうまで標高差は1,000mぐらいあり、気候や温度が全然違ってくるといことで、消費者目線で見たとときに、それを活かした多様な農産物を売り込んでいくことが重要だということでした。また一方で、生産者の立場から見た、農産物の輸出戦略についても考えていく必要があるというご指摘もありました。さらに、第1次産業、第2次産業、第3次産業、特に農業と観光をうまくリンクさせることで、既存産業の活力を高めていってはどうか、という意見がありました。

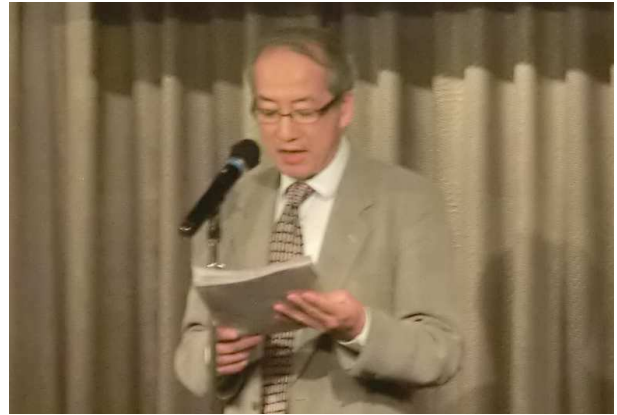
後半部分では、新産業をこの地域へどう取り込むか、ということでお話をいただきました。

1つは、三遠南信地域の豊富な森林資源を、なんとか活かさないか、木材の海外輸出などがうまくできないだろうか、というご発言が根羽村の大久保様、伊那市の白鳥様からありました。そのためには、道路整備も必要ですし、港と森林組合、あるいは複数の森林組合が連携することで、可能性が生まれてくるのではないかということでした。また、そういった新たな取組を生み出していくためには、やはり連携のプラットフォームづくりといったものも重要になるのではないかということでありました。

最後に、これはアドバイザーの萩本様からご指摘をいただきましたが、新たな産業を育てていくためには、長期的な視点をもって、人を育てる、産業を育てるといことが重要であって、それをこの地域全体で取り組んでいく必要があるのではないかというご意見をいただきました。

以上で、「技」分科会の報告とさせていただきます。

## ■「風土」分科会コーディネーター 法政大学 教授 高柳俊男 氏



「風土」分科会では新ビジョンの基本方針、「流域文化創造圏の形成」をテーマに議論いたしました。

まず、関連報告として、2名の方にご報告をしていただきました。まず、JR東海飯田支店の大坂勝典様から、飯田線の、とくに秘境駅を活用した取組についてお話いただきました。次に、南信州広域連合事務局の松江良文様から、民俗芸能をどう保存し、若い世代にどう伝えていくのか、あるいは企業にどうそれを支援してもらうのか、といった取組についてご説明をいただきました。

その後、重点プロジェクト4「三遠南信探訪プロジェクト」及び、重点プロジェクト5「中山間地域が輝くプロジェクト」について意見交換を行いました。ご意見の内容は多岐にわたりましたので、全部は紹介できませんのですが、いくつか印象に残っているものをご紹介します。

「三遠南信探訪プロジェクト」では、この地域にはいろいろ有用な素材があり、それをどう活用していくかということ、皆様から取組のご紹介をいただきました。例えば全国的に星で有名になった阿智村では観光的な施策を一貫して行うDMOがあり、果物の町松川町では設立を目指している最中で、袋井商工会議所からは三遠南信の花火サミットを始めた、というお話がありました。また設楽町では、これからつくる新

しい道の駅に、今ある民俗資料館を移動させ、もっと魅力あるものにする、というお話がありました。

それらを踏まえて大事なこととして、あれもある、これもある、ではなくて、これが本物だ、という核となるものを中心に観光PRをしていかななくてはいけない、というお話が豊橋商工会議所の神野様からありました。また、個々の市町村で互いに競走して敵対関係になるのではなく、むしろ点を線にして面にしていくようなネットワーク化によって、観光客の誘致、誘客を共同で進めていくことの重要性が語られました。

次に「中山間地域が輝くプロジェクト」では、この地域は広大な中山間地域を抱えており、取り組むべき重要なテーマです。例えば、浜松市や新城市商工会から、中山間地域を活性化するための、地域おこし協力隊の取組についてご報告がありました。3年間の任期が終わったあと、地域に残る人が多い自治体もあれば、あまり残らない自治体もあるようです。これについては、午前中の住民セッションでも集中的に議論されたという報告もありました。

また、県境付近では、1970年代から、愛知・長野県境域開発協議会をつくって現在に至っているとして紹介がありました。それから「技」分科会でもあった、昨日で103回を数えた新城市の軽トラ市についても報告がありました。

それらを踏まえて、地域おこし協力隊は共通の目的を持って活動しているので、連携を図ることが大事であり、協力隊のOB・OGが新しくネットワークを立ち上げたという話も出ました。それからこの地域の資源として、やはり飯田線があることは大事だろうという指摘もされました。今から線路をつくることはなかなかできないことであって、バス路線等も含め、これらをきちんと残して活用していくことは重要な課題と言えましょう。

以上で、「風土」分科会の報告とさせていただきます。

#### ■「住・人」分科会コーディネーター

静岡文化芸術大学 副学長 池上重弘 氏



「住・人」分科会では新ビジョンの基本方針、「安全安心な広域生活圏の形成」と「地域の持続的発展に向けた人材集積地の形成」をテーマに議論いたしました。特筆すべきことは、ギャラリーの中に女性がとても多かったということです。そこに希望を見出しました。

討論に先立って、LLP マリッジ・ローカル・コネクト代表の木村様から、連携した婚活事業について、また NPO 未来化プロジェクトの川端様から、若者の人材育成についてということで、浜名湖若者1000人会議プロジェクトについてご報告をいただきました。

そして意見交換では、7つの重点プロジェクトのうち、重点プロジェクト6「住むなら三遠南信プロジェクト」、そして7「人生100年時代プロジェクト」の2つを取り上げました。

まず、「住むなら三遠南信プロジェクト」についてですが、大きく4つの論点がありました。

1つ目は少子化、人口減少といった状況に対して、どんな対策を展開しているかということでした。例えば、若者の定住住宅を用意するなどの住宅支援、医療費の無償化、教育環境の整備などの子育て支援など、行

政としての取組ですが、非常に多様なものが紹介されました。

2つ目は、交流が定住につながるという考えのもとに、まずは交流を促進しようという具体的な取り組みがいくつか紹介されました。例えば、うるぎ米そだて隊というプロジェクトでは、村を知ってもらうために、年に数回村に来てもらい一緒に米づくりをして村を知ってもらい、その交流を通じて村への愛着を持ってもらう、というものでした。また、長距離ランナーの合宿を誘致する走る村プロジェクトでは、ランナーがすぐに転入するわけではないのですけれども、足しげく通ってもらう試み、ということでご報告をいただきました。

3つ目は移住者のことでもあります。最近ではリタイア組のみならず、自然の中でのびのび子育てをしたい、というようなファミリー層の移住者が増えているとのことでした。東京から遠くて不便なこと、ゆっくりせざるをえないことが強みだ、というポジティブなご意見もありました。また、移住先には自分の生き様を体現できる場としての意味を求めるというお話もありました。

しかしながら、自然環境だけではなく、実は住んでいる人が大事で、人が人を呼ぶのだ、というご指摘もありました。そのためには、移住者をサポートする地域の人材が大切であるとか、孤立させないようにして言いたいことを言える環境をしっかりと準備することが大事であるとか、生活基盤や事業基盤に対する優遇補助制度など、自立の支援が人の定着につながり、そうして定着した人がまた新たな人を呼ぶということも非常に重要なポイントでした。

4点目は、地域がダイレクトに人を呼ぶというだけではなくて、企業や団体との連携によって人を呼ぶというアイデアでありました。例えば、企業版のダーチャの紹介がありました。ダーチャとは、旧ソ連で生まれた郊外型の菜園付きセカンドハウスのよ

うなものです。こうしたダーチャをつくることで、メンタルヘルスケアとして企業の人たちがやってくる、というお話がありました。また、JICA や JOCA と連携して、地域外の学生を呼び込む、グローバルな人材育成のグローバルユースキャンプというお話や、逆参勤交代、つまり東京や江戸に行くのではなくて、東京や名古屋の企業の社員にこの地域に来てもらい、社員がリフレッシュして戻っていくというような発想もおもしろいのではないかとのご提案をいただきました。

次に、重点プロジェクト7「人生100年時代プロジェクト」についてです。人生100年時代という、どうしても、ミドル以上の人がどう地域と関わるか、と考えるがちなのですが、ここでは、地域教育の促進、人材の育成、定着化という柱が立っており、子供たちとどう関わるか、若者たちにどう投資するか、という非常に未来志向な話が展開しました。

例えば、各自治体や企業が得意とする分野で、学びや体験の機会を提供しあって、地域内の人材育成や定着につなげるプロジェクトが紹介されました。また、都市部の大学生との交流によって地域の魅力を発見し、自身の未来の夢を描けるような教育環境づくりをとともに目指すということもお話がありました。また飯田市では、市長自ら先頭に立って、卒業すると外に出てしまう高校生までの間に、地域を理解してもらい愛着を持ってもらう、という地域人教育を展開していて、その教育を受けた子は、むしろ大学に行かないというような話も出てきました。

ここで、地域と言うのは、個別の場所を指すのではなく、例えばある地域を学んだとしても、それが他の地域での学びにもつながる、あるいはより広い地域での学びにもつながっていく、ということで、自分の住んでいるまちを理解するという視点が、

ひいては三遠南信地域への愛着につながって行くのではないかというご指摘でした。またさらに、高校と大学の連携も、今後はしっかりと進めてもらいたいとのことで、私ども公立の大学であれば受けて立たざるを得ない宿題も最後にいただきました。

以上をもちまして、「住・人」分科会の報告とさせていただきます。分科会にご参加いただいた皆様に改めて御礼申し上げます。

第 26 回三遠南信サミット in 東三河では、「三遠南信流域都市圏の創生～日本の県境連携先進モデル～」をテーマとし、全体会から分科会を通じ議論を行いました。このサミットのテーマは新ビジョンのテーマでもあります。新ビジョンでは、三遠南信地域の住民がこの地域の持続的発展と自立のために、この地域を創生するという考えのもと、2027年のリニア中央新幹線の開業や、それと併せた三遠南信自動車道の概ねの完成が期待される中、「大都市圏・世界と結ばれる広域連携都市圏の形成」「中部圏での中核的な都市圏の形成」「流域循環圏の形成」の3つの地域像を目指してまいります。

本日は、サミットに先立ち、SENAの役員会であるSENA委員会に有識者を加えた拡大委員会において、以下の5つの基本方針についてご了承をいただきました。

- 「道」…… 地域内外の人・物・情報の交流を一層進めることで、中部圏の中核的都市圏となる地域基盤の形成を目指します。
- 「技」…… 地域内の産学官が連携し、既存産業の活力を増進させつつ、産業構造の転換を先取りすることで産業創造力を強化し、革新を取り込む産業創造圏の形成を目指します。
- 「風土」… 地域資源の新たな価値を見出し、保存・継承と活用・発信を行うことで、流域文化創造圏の形成を目指します。
- 「住」…… 地域全体の生活環境を向上させるとともにこの地域に適した居住スタイルを確立し、安全安心な広域生活圏の形成を目指します。
- 「人」…… 次世代を担う人材の育成や確保、多様な文化が共生する社会の形成を通じて、地域の持続的発展に向けた人材集積地の形成を目指します。

さらに、ビジョン達成のため選択と集中により掲げられた7つの重点プロジェクトについてご了承いただき、サミットの全体会、分科会を通じ更なる議論を深め、この新ビジョンの下、それぞれの主体において事業を進めていくことといたしました。今後は、パブリックコメントを実施するなど、地域住民への浸透を図ってまいります。

ビジョンの計画期間である2030年までの12年間、三遠南信地域は大きな転換期を迎えます。SENAの構成団体の皆様はもとより、本日ご参加の関係団体、関係者の皆様とともに、連携活動による新たな価値の創出に向けて全力で取り組んでまいります。

これらの成果をここに集うすべての主体が共有し、第26回三遠南信サミット2018 in 東三河のサミット宣言といたします。

SENA構成自治体においては、地域に共通する課題の解決に向けて積極的に連携事業に取り組み、広域連合設置を見据えた地域連携のプラットフォームづくりに邁進してまいります。

平成30年10月29日

三遠南信地域連携ビジョン推進会議  
三遠南信サミット2018 in 東三河

## ■ 次回開催地代表挨拶

飯田市長 牧野光朗



第26回三遠南信サミット2018in 東三河が、佐原市長はじめ、豊橋市の皆さん、そして東三河地域の皆さんの大変なご尽力で、盛大に開催できましたこと、改めて敬意と感謝を申し上げます。

三遠南信地域はいよいよ、バージョン2.0という新たなステップに入ります。浜松市の鈴木市長を筆頭に、私ども副会長もともにバージョン2.0の目標に向けて力強く歩みを進めていきたいと考えています。

来年は、私ども南信州地域での三遠南信サミットの開催ということになります。広域連携のモデルを三遠南信地域からつくっていくということですが、南信州地域におきましては、広域連合を主体とした様々な地域連携プロジェクトが動いています。中でも、産業振興と人材育成の拠点として、リニア中央新幹線の長野県駅のすぐ近くに、旧飯田工業高校を利用した施設整備を進めています。萩本専務理事にも所属していただいている南信州・飯田産業センターも、来年1月にそちらへ全面移転し、グランドオープンとなります。今後、産業振興、人材育成にかかる地域連携の拠点として育て、この流れをぜひ三遠南信地域にも広げたいと思います。

また、三遠南信自動車道の天龍峡大橋も、平成31年度中の完成を見込んでいる状況ですが、この天龍峡大橋は、自動車が走る桁

の下に自動車専用道にも関わらず遊歩道が通っている全国でも非常に珍しい橋になります。名勝天龍峡の新たな顔が見え、三遠南信地域の連携拠点の1つとしていければと思っています。

この三遠南信地域の連携は、新ビジョンで掲げているように、必ずや県境連携モデルとして全国から注目されるものだと思います。そのためには、サミット宣言で述べたように、1つ1つの事業を積み重ね、その連携がどのようなものであるかということ全国に示していくことが重要であると考えます。

次回の三遠南信サミット in 南信州におきましては、そうした連携の積み重ねを皆様方とともに確かめられるサミットを目指していきたいと考えております。有意義なサミットとなるよう皆様方にもよろしくお願い申し上げます。

